Exclude Children～the seven children～

竣慎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｅｘｃｌｕｄｅ　Ｃｈｉｌｄｒｅｎ～ｔｈｅ　ｓｅｖｅｎ　ｃｈｉｌｄｒｅｎ～

【Ｎコード】
Ｎ２９２３Ｅ

【作者名】
竣慎

【あらすじ】
この世には存在しない子供たちＥｘｃｌｕｄｅＣｈｉｌｄｒｅｎ。子供たちをＥｘｃｌｕｄｅＣｈｉｌｄｒｅｎへと追い込んだ大人へ今！宣戦布告しろ。

ＦＩＬＥ１；　取り外された歯車

人一人。時代の波に飲まれてもそれを気にする物。その事実を知る物は少ないであろう。歯車は正常に動いている中。壊れて動かなくなった歯車は取り除かれる。それが常識。誰がそんなことを気にするのであろうか・・・・・・

暗い路地裏、一人の男がいた。身にまとっていたスーツは所々破れているが、そんな事は気にせず男は息を切らしながら走っていた。

「ま、待ってくれ。俺が悪かった。だから・・・・・・殺さないでくれ！」

男は呪文のように何度も何度も言う。良く見ると男の後ろには小さな影がある。男はその影が視角に入ると一層怯える。そして男はゴミ箱に躓きその場に転倒してしまった。

その間に後ろの影は男との距離を詰める。

「ヒィッ！？やめろ・・・・・・殺さないでくれぇ！」

地面に腰をつけながら後ろに下がる。男の腰はもう抜けていて歩けないのであろう。影にもそのことが解ったのか、早歩きだった影はゆっくりとしたペースになりじわじわと男に近づく。

ここからでは逆光で見えないが。影の正体はどうやら子供らしい。

その子供の手には小さな銃が握られている。

そしてその銃を男の額に当てる子供。

「た、頼む！か、金ならいくらでも――――」

パンッ！

乾いた音と共に男の声が消える。その男の声は永遠に閉ざされたのだ。子供は頬についた返り血を拭いながら来た道を戻る。今撃った男の事には見向きもせずにそのまま夜の闇へと消えて行った・・・・・・

二日後。榊原高等学校。

学校内では一昨日の事件で持ちきりであった。

――――おい、聞いたか？うちの校長が一昨日銃殺されたって話。――――ああ、確か新聞に載ってたよな。――――結構面白い校長だったのにな。――――ああ、でもあの校長裏ではヤバイ事やってたみたいでさ、今度もそれ関係で殺されたんじゃないかって話だぜ。

話の内容は一昨日の深夜。帰宅途中だった。榊原一之介（さかきばらいちのすけ）。榊原高等学校の校長が銃殺される事件。何でも職場の教師と飲みにいって別れた後殺されたらしく、学校の前にはマスコミの人だかりでいっぱいと言う状態なのだ。

「なあ天竜寺。お前は知ってたか？」

「えっ僕？いや、みんなと同じぐらいのことしか知らないよ。」

いきなり話を振られた少年は戸惑いながらも返答する。
黒くて長い髪をした少年。名前は天竜寺真央（てんりゅうじまお）。前髪は鼻の辺りまで伸びていて顔は良く見えないが、少し垂れ目で瞳は少し赤黒い。体躯だけで見ると中学生とも間違われそうなぐらい小さい。が髪の毛を上げると結構整った顔立ちをしておりイケメンの部類に入る。しかし身長のこともあるのか、カッコイイと言うよりはカワイイといったほうがしっくり来る感じもする少年。

「だけど犯人は当分捕まりそうに無いよな。」

「えっ？どうしてなの。」

一人の生徒が新聞を広げながら言った。真央はその事について聞く。

「だって新聞にも書いてあるけど、銃はポケットピストルで処分にはあんまり困んないだろうし、それに犯行現場には子供の指紋があって、事件に関係があると思ったら何と、指紋の該当者がいなかったって話だぜ。」

「ふつー指紋の該当者なんて簡単に見つかるのか？」

隣の男子生徒が首を突っ込む。新聞を広げていた生徒はそれをたたみながらその疑問に答える。
「ばーか。指紋は警察の捜査に重要な手がかりだから、警察のパソコンには住人の指紋は全部突っ込んであんだよ。」
そう。その通りである。しかし今回の事件では指紋の該当者がいなかった。指紋の大きさからして１３才から２３才ぐらいまでらしい

が該当者はいない。となると答えは限られてくる。日本の何処の町にも住民票を出さず。指紋を採取された事の無い人間か、あるいは採取はされたがパソコンから何らかの理由でデータを消したかだ。

「だけど００７じゃないしそんな事しなくても手袋すりゃーいい話だよな。」

確かにそうだ。危険を冒してまでデータを消そうなんて思う人間がいるはずが無い。

そんなことを話していると予鈴がなる。それと同時に小太りの教師が入ってきた。

「おい、お前ら大事な話があるから席に着け。」

小太りの教師は額に汗を滲ませながら言う。

生徒達は疎らではあるが教師の言われたとおりに席に着いた。

「えー、何と言うかな。まあみんな知っていると思うが一昨日校長先生が殺害された。今学校で対処しているがしきれていないのも現状だ。とり合えず今日は緊急で学校を閉めたいと思う。みんなは極力、夜の外出には気をつけてくれ。ああ、あとマスコミが来ても何にも喋らない様にしてくれよ。以上だ。」

小太りの教師はそういい残すと足早に教室を出て行ってしまった。

生徒達はヤッパリな。と言いながら帰り支度を始める。真央も例外なく帰り支度を初め、そして帰って行った。

その頃、警視庁。
「おい！一昨日の事件の資料。まとまったか。」
「無理ですよ。現場に残ってるものが少なすぎます。報告書なんてまだ書けませんよ。」

警察は一昨日の事件の事でごった返していた。日本では一般市民の拳銃所持は法律違反である。だからマスコミにとっては願ってもいない大ネタなのだ。その対応により警察の信頼度も変わる。という訳で警察署はごった返していた。

「樋上（ひがみ）さん。何なんですかそれは。」
樋上と言われた刑事は振り向く。
ボサボサの髪としており顔は良く見えない。それに加えてタバコをふかしているので見た目は不健康極まりない状態であった。
「これは一昨日の事で調べてたんだ。今知り合いの教授に資料を頼んでおいた。」
説明しているとパソコンの横の機会からＦＡＸが出てくる。樋上は散らかっている机の物を蹴り飛ばしＦＡＸで送られてきた紙を凝視する。
「どうでしたか？」
「ああ、教授は解らないそうだが、知ってそうなやつのホームページを教えてもらった。」
樋上は乱暴にキーボードを叩きアドレスを打っていく。そのとき。

ブツンッ！

「はぁっ！？」
パソコンが音を立てて切れた。

「ちょっ！待てよ、俺は何にも――――」
樋上がびっくりしていると
再起動したパソコンに文字が映し出される。
マウスを動かすがこっちの命令を受け付けない。
「なんですか！これは。」
「た、多分。誰かがこのパソコンをハッキングしてるんだな。」

パソコンの画面に言葉が記される。
「何だこれ？『親愛なる警察諸君。我々はＥｘｃｌｕｄｅ　Ｃｈｉｌｄｒｅｎ。一昨日の事件は私達が行った物だ。我々は目的を成すべくこれからも人を殺(あや)め続けるであろう。止められる物なら止めてみろ。我々は決して屈しない。この腐敗した日本を変えるまでは・・・・・・『・・・・・・・なんじゃこりゃ。宣戦布告か？」

「Ｅｘｃｌｕｄｅ　Ｃｈｉｌｄｒｅｎ。『存在しない子供たち』って意味ですか？」
「ああ、そうだと思う。よし！とり合えずこれを報告書として出しとけ。俺はやる事が出来た。」
「はい、わかりました」
樋上は重い腰を上げタバコを灰皿に押し付ける。そしてごった返している部屋から出て行った・・・・・・

深夜一時。
一人の少年が誰かと電話をしている。
「いいのか優喜。警察にあんなの送って。」
暗闇に包まれているせいで顔が良く見えない。
「いいんだよ。Ｅｘｃｌｕｄｅ　Ｃｈｉｌｄｒｅｎ。の事をもっと教えないとな、明日はマスコミにでも送ろうかな。」
電話をしている少年が薄く笑う。
「まあ、こっちとしてもあのクソジジイを殺せただけありがたいけどな。」
「どうせ明日も休校だろ。こっちを手伝ってくれよ――――」
ホテル街のネオンが少年の顔を照らす。
「――――頼んだぜ真央。」
「ああ、聖戦の始まりだ――――」
気付いた時には壊れていたはずの歯車は他の歯車とは反対に回り始めた・・・・・・

ＦＩＬＥ１；　取り外された歯車（後書き）

どうも竣慎です。今回の小説をどうして書こうかと思ったかと言うと何となくシリアス展開と言うか、銃器を使った感じの小説を書きたかったんですね。
今ガンダムＳＥＥＤとかコードギアスとかの二次小説も五話ぐらい書いてあるんですけど機体の戦闘の表現が難しくて大変で困ってます。
誰か教えてくれる人がいれば幸いです。
竣慎でした。。。

ＦＩＬＥ２；　黒い歯車

榊原一之助が殺害されてから一週間が経とうとしていた。今世間ではＥｘｃｌｕｄｅ　Ｃｈｉｌｄｒｅｎの事で持ちきりであった。
警察に暗号文が送られた次の日にマスコミに流されたのが原因であった。
そして一週間の間に殺された人数は榊原を入れて４人。どの死体も頭を一発で打ち抜かれており、現場にはＥｘｃｌｕｄｅ　Ｃｈｉｌｄｒｅｎと書かれた紙が落ちていた・・・・・

「昨日で４人か。そろそろマスコミが本格的に騒ぎ出しそうですね。」

場所は警視庁、早朝の資料室。ここには過去の事件の資料や住民などの個人情報が収められている場所である。
そこにいるのは樋上とその部下。
樋上は相変わらず口にタバコをくわえパソコンを凝視していた。

「何を調べているんですか？」
「Ｅｘｃｌｕｄｅ　Ｃｈｉｌｄｒｅｎの手がかりを探してるんだよ。」
樋上はパソコンから目を離さずに答える。樋上この一週間警視庁に泊り込みで資料を集めていた。その理由はＥｘｃｌｕｄｅ　Ｃｈｉｌｄｒｅｎと被害者の関係性。
この一週間の事件でわかっている事は三つ。
被害者は裏では密輸などの犯罪に関わっていた事。

加害者、つまりＥｘｃｌｕｄｅ　Ｃｈｉｌｄｒｅｎは１０歳から２３歳の男女。

Ｅｘｃｌｕｄｅ　Ｃｈｉｌｄｒｅｎは組織の可能性が高く、構成人は４０人強。

と言うことである。

ピー

パソコンから電子音が鳴る。
パソコンにはメールが出ており樋上はそれを開けた。
「来た！」

「何がですか？」
樋上の目の色が変わる。

「来たんだよ、手がかりが。前に話しただろ知り合いの教授の話。その教授に調べてもらったんだ、１０歳までに死んだ子供の指紋をな。」

樋上がすぐさまその電子メールをコピーする。
この前みたいにハッキングされてパソコンを壊されない為であろう。
灰皿にタバコを押し付けて戸棚からファイルを引っ張り出す。ファイルの名前は死亡報告書。そうその名の通り亡くなった人の記録を記してあるファイルである。

「おい！一致したぞ。」

二時間後。捜査本部に樋上が飛び込んでくる。
死亡報告書の中から一致した指紋。８歳で死亡したことになっている。久慈来夏（くじらいか）。男で生きていれば現在１６歳だ。

「だが、この少年は死んだはずじゃないのか？」
そう疑問をもらしたのは口ひげを生やした６０代の対策本部長。
「じゃあ何故指紋が一致した？しかもこの少年の繋がりはこれだけじゃない。三人目の被害者は少年の父親だ。」

三人目の被害者の名前は久慈友昭（くじともあき）。銀行員で周りからも慕われていたらしいが、裏では業務上横領に関わっていたと言う黒い噂も合ったらしい。

「久慈来夏は今、久慈翔太と名乗り榊原高等学校に通っています。先ほど逮捕状も貰ってきました。」

樋上の右手には逮捕状が握られていた。
「あくまで久慈来夏は未成年なので名前までは出しませんがもう４人も殺されています。このまま野放しにしておくわけにはいけません。」

樋上のその一言に対策本部長は組んでいた腕を解いた。

「わかった。それでは樋上と千葉、坂本の三人はその榊原高校に行

ってくれ、他の奴は樋上が集めた資料を基に他の指紋も解析してくれ。解散！」
本部長の言葉で部屋に集まっていた警官は全員慌しく動き出した。

「久慈。何か警察の人が話があるそうだぞ。」
クラスの奥に座って友達と話していた少年が入ってきた教師を見る。
少年は黒い髪を肩ギリギリまで降ろしていて、結構整った顔をしていた。
周りの生徒も同様に来夏を心配そうに見る、が来夏自身は最初は不審な顔をするがすぐに立ち上がり教室を出て行き、警官が待っている応接室に向かって行った。

「久慈翔太くんだね。私は警視庁Ｅｘｃｌｕｄｅ　Ｃｈｉｌｄｒｅｎ対策本部の樋上だ。こっちは千葉と坂本。」
樋上は警察手帳を見せてから隣にいる仲間の刑事を紹介する。そして隣の刑事も手帳を見せた後応接用のソファーに座る。
来夏もそれを見ると直ぐに座った。

「俺は別に悪いことを覚えはありませんよ。」
来夏は平然とした顔で三人の刑事を見る。その表情からはあせりは感じられない。むしろその様子は樋上には挑戦しているようにも見えた。
「Ｅｘｃｌｕｄｅ　Ｃｈｉｌｄｒｅｎっていうのは知っているね。」

来夏は、はいと頷いた。しかしそれ以上何も言わない。
「単刀直入に聞く。久慈翔太くん。君はＥｘｃｌｕｄｅ　Ｃｈｉｌｄｒｅｎの一人じゃないのか？」
応接室が一瞬静かになる。三人の刑事は来夏の顔を見て息を飲む。
「・・・・・・」
来夏は答えない。黙り込んでしまった。しかしその顔にはあせりはない。
不意に来夏は組んでいた腕を解き口を開く。
「何で俺がそのＥｘｃｌｕｄｅ　Ｃｈｉｌｄｒｅｎだと思うんですか？」
「現場に残されていた指紋を調べて君の指紋が一致したからだ。」
「その現場に俺が前にいたかもしれないじゃないですか。それにその被害者さんと俺との関係は何にも無いでしょう。」
樋上が唇を噛む。確かに指紋は現場に残されていた。しかしあくまで現場だ。久慈来夏がそこに来た事が無いという証拠は何処にも無かった。だかこの事件に久慈来夏が関わっているのは明白であった。だから樋上は証拠が足りていないのを承知で来夏を挑発して本心を引き出すつもりだったのだ。
「・・・・・・」
応接室が再度沈黙に包まれる。樋上の額には汗が滲み、一方来夏は平然とした顔で樋上の返答を待っている。
「じ、じゃあ質問を変えよう。君の名前は久慈翔太くんか？」
来夏の眉が微かに動く。
「はい、俺は久慈翔太。です」
来夏はそう断言した。

「そうか、それじゃあこれを見てくれるかな？」
樋上は自分の鞄から一枚の紙切れを取り出す。そこには早朝調べて打ち出したＥｘｃｌｕｄｅ　Ｃｈｉｌｄｒｅｎの秘密。つまり『久慈来夏』と言う少年の情報。
来夏は樋上からその紙切れを見て目の色を変える。
「これは久慈来夏と言う少年の資料だ。ただしこの少年は９歳で病死と言う事になっている。だが今回現場にはこの久慈来夏の指紋があったんだ。そして久慈来夏は一昨日殺された久慈友昭の子供だ。」
樋上は来夏の手を掴み取り出したもう一枚の紙に指を押し付ける。
「これは指紋を取る為の紙でね。すぐに指紋が出てくる。」
樋上は出て来た指紋と『久慈来夏』の指紋を重ね合わせた。

結果は一致。

「これで君は久慈翔太ではなく久慈来夏と言うことが証明された。そして同時に君と被害者。久慈友昭の繋がりも出た。さあ如何する『久慈来夏』くん」
樋上が一致した紙を来夏の前に出す。
追い詰められた来夏の顔からは余裕の笑みはすでに消えていた。額から汗を垂らし、先ほどとは全く逆の立場に立っている。
とその時。

ピリリリリリーーー

来夏の制服のポケットから携帯の電子音がする。
「あの・・・・・・出て良いですか？」
「ああ、手短にな。」
来夏は大きく深呼吸し、落ちついた所で携帯に出る。
「はい、久慈です。」
「――――だ。――――竜――――から――――てから――――こい。」
耳に当てている携帯から僅かながら会話がもれてくる。しかし来夏は黙って聞いているだけなので何の話かはわからない。
来夏は最後にわかったと小さく言って、電話を切った。

「あの・・・・・・刑事さん。」
来夏はソファーに腰を掛けて頭をくしゃくしゃと掻く。
しばらく経つとその手も止まりやがて動かなくなる。
「お、おい大丈夫か。」
樋上の隣にいた千葉刑事が心配したのか、立ち上がり来夏の肩に触れる。
その刹那。
パンパンパン
乾いた3発の音が応接室に響く。樋上と坂本は一瞬何が起きたかわからなかった。しかしそれも千葉の悲鳴で気付く。
「千葉！！」
来夏は制服の袖からポケットピストルが出て来夏が千葉の身体に3

発、発砲したのだ。
千葉が倒れたのを確認した来夏は直ぐに残り二人の刑事の方へ向く。
「クソッ！」
坂本が携帯していた銃で来夏を狙う。
しかし照準が合う前に乾いた音が４発。３発が坂本へ１発は樋上への牽制、そして坂本が倒れる。
なびく髪の間に見えた目は先ほどの弱々しい少年とは違い。それはまるで獣であった。
樋上は素早く横に飛び弾丸をかわす。そして銃を取り出して来夏に向ける。正直当てる自身は無かったが、向けなければ確実に殺される。頭で考える前に体が動いた。

パン

１発の銃声。撃ったのは来夏。しかし当たった場所は樋上の頭上にある花瓶。銃弾が当たった事により花瓶は音を立てて粉々になり樋上の上に落ちてきた。

「すみません刑事さん。俺はまだ捕まるわけには行かないんです。」

来夏の声が聞こえ樋上が声の方向へ向くと、来夏は窓の手すりに足を掛けて出て行った。
応接室は３階であった。普通ならこんな逃走手段は使わないであろう。しかし銃声を聞きつけた教師がもうじき来る。そう考えるとその判断が一番良策であったのではないか。

３階から飛び降りた来夏は地面に上手く着地し、そのまま走って逃げていった・・・・・・

来夏は学校を出た後近くの廃ビルに隠れ夜を待っていた。
来夏の息は荒く、目はもう普通の少年に戻っていた。

「来夏。うまく逃げてきたようだな。」

目の前に少年が現れる。茶髪をスラッと降ろした少年。見た目は良く美少年の部類に入るであろう。
来夏はその声に一瞬怯えたが直ぐに誰かとわかるとその怯えも止まる。

「優喜か。さっきの電話はおまえが天竜寺に言ったのか？」

「ああ、おまえは俺の監視下にいるからな。」

優喜と呼ばれた少年は薄く笑う。

「あの樋上とか言う刑事。俺たちの秘密に近づいてるみたいだ。本当に殺さなくて良かったのか？」

「データがあってもその本人が居なければ捕まえられないだろう。」

優喜は来夏に紙の束を投げ渡す。

「新しい家だ。夜になったら真央が迎えに来る。そのときまでここにいろ。」

そう言うと優喜は廃ビルの陰へと姿を消していった・・・・・・

黒い狂気に満ちた歯車は処分される事なくそのまま逆回転で回り続けた・・・・・

ＦＩＬＥ２；　黒い歯車（後書き）

自分では結構この話は気に入っています。
飽きる前にさっさと完結させたいと思います。
予定ですが多分７話～１０話で完結だと思います。完結できるように頑張りますので見てください。。。

ＦＩＬＥ３；　直り掛けた歯車

「おい、二人の容態はどうなんだ？」

病院の待合室。樋上は手術をし終わった医師に聞く。

「ええ、身体には二人とも１発ずつ。しかし両方とも臓器は傷つけていません。運が良かったのか幸い大事な血管にも当たらず、肉だけを貫通していったようです。他には手の甲や太股などですがこれも大事には至りませんでした。暫く入院していただければ治りますよ。」

医師はそう言うとマスクを取り出て行った。

「良かったですね、樋上さん。二人とも運が良かったんでしょうね。」

「いや・・・・・・偶然じゃないな。」

樋上はポツリと言う。

昨日の来夏の目は獣だった。しかし理性は最低限残されていた。だから二人は死なず、樋上も花瓶による切り傷だけで済んだのだ。もしなんのためらいも無く撃たれていたら今頃三人とも死んでいた。樋上はそう思うと背筋がゾクッとするのがわかった。

あの後来夏は失踪した。保護者は架空の人物で家の住所もでたらめであった。そうなると事実上逃げられたという事になる。一応指名手配はしてあるが、Ｅｘｃｌｕｄｅ　Ｃｈｉｌｄｒｅｎの行動範囲を考えるとまず捕まらないであろう。

「樋上さん。これは如何しますか。」
部下から受け取ったのは残された現場から採取された指紋と樋上が見つけた死亡報告書でヒットした人を集めた資料。
「何人ヒットしたんだ？」
「久慈来夏をあわせると三人です。」
部下は端からその資料を読み上げていく。
「最初は久慈来夏。４人目の被害者、久慈智明の息子で８歳の時に死亡報告されていました。２人目は佐納文香（さのうふみか）。性別は男。２人目の被害者、佐納貴文（さのうたかふみ）の息子で６歳で死亡報告が出されています。現在は１４歳。榊原付属中学に佐納友宏（さのうともひろ）と名乗り通っています。最後は宮戸真紀菜（みやとまきな）。性別は女。３人目の被害者、宮戸大二郎（みやとだいじろう）の一人娘。この子も６歳で死亡報告が出されており現在１４歳。榊原付属中学に名前を変えずに通っています。」
一通りの説明が終わる。これで解った事が増えた。一つは全員が被害者の子供。そして全員が死亡扱いになっている。
二つ目は全員が榊原関係の学校に通っていると言う事。
三つ目は全員死亡報告されたのは１０歳より前と言う事。
「待て。そうなると一番最初の被害者の子供はどうなんだ。」
「榊原一之介は２人子供がいたそうです。しかし事故でその２人と妻を亡くしています。ちなみにその２人の子供はまだ２歳前後だったので指紋の採取などの資料は見つけられませんでした。」

「そうかそれじゃ――――」
「樋上さん！大変です。」
樋上の声が打ち切られる。入ってきたのは対策本部の刑事。
「如何したんだ。そんなに慌てて」
刑事は息を切らしていた。そこまで大変な事態とはなんなのだろうか。もしかしたら5人目の被害者が出たのか？
「Ｅｘｃｌｕｄｅ　Ｃｈｉｌｄｒｅｎ　を名乗る少女が捕まりました」
「・・・・・今何処にいる。」
内心の驚きを抑え、先に必要な事を聞く。
「第三取調室にいます」
そう聞くと樋上は全力で走っていった・・・・・・
「君は本当にＥｘｃｌｕｄｅ　Ｃｈｉｌｄｒｅｎなのか？」
第三取調室、そこで取調べが行われていた。樋上と向き合っているのは少女。黒い髪を腰まで下ろして、落ち着いた雰囲気ではあるが今の少女は何処か落ち着きが無い。
「わ、私はＥｘｃｌｕｄｅ　Ｃｈｉｌｄｒｅｎの一人でコードネームはシックスです。本名は宮戸真紀菜。３人目の被害者を殺しまし

た。」

真紀菜はそう言う。しかし言葉に覇気がないやはり何かに怯えているのだろうか。

「どうした？何に怯えている。」

樋上が少女に聞く。が少女は肩をビクつかせただけで何も答えない。本当にこの少女が被害者を殺したのかは樋上にはどうしても思えなかった。来夏の時もそう思っていたが来夏はまだ自信や余裕があった。しかしこの真紀菜は自身どころか、ここに居る事すら怖がっている。そんな状態で人を殺す事が出来るのかが樋上にはどうしても納得できなかった。

「わ、私怖いんです。自分が。」

消え入りそうな声で言う少女。

「お父さん殺しちゃったのに真央君や優喜君にまだついていってる自分が・・・・・・」

「『真央』と『優喜』って言うのは誰だ？Ｅｘｃｌｕｄｅ　Ｃｈｉｌｄｒｅｎのリーダーか？」

真紀菜は静かに頷く。もっと詳しい事を聞こうとするが、真紀菜は仲間の事はあまり教えたくないと言い口を閉ざしてしまう。

「じゃあ質問を変えよう。Ｅｘｃｌｕｄｅ　Ｃｈｉｌｄｒｅｎは何人いる？」

「実行部隊は私を入れて7人。資金面で助けてくれる人が3人。実

行部隊の人は私も数人しか会った事なくて知っているのは人数だけです。」

真紀菜は少しずつではあるがＥｘｃｌｕｄｅ　Ｃｈｉｌｄｒｅｎの秘密を教えてくれる。後もう少しでもっと内部の事を聞きだせそうであった。

「じゃあその『真央』と『優喜』、そして君と来夏で４人なんだね。」

真紀菜は一瞬答えを渋ったが直ぐに小さく頷く。

それから３０分。樋上は真紀菜からＥｘｃｌｕｄｅ　Ｃｈｉｌｄｒｅｎの情報を聞き出していった。

「Ｅｘｃｌｕｄｅ　Ｃｈｉｌｄｒｅｎは親に『抹消』された人が集まってその親に復讐する為に作られた組織です。私もお父さんに『抹消』されました。」

真紀菜の身体は小刻みに震えていてあまり多くの情報を聞き出すのは困難であった。

「来夏君は銃器を扱うのが上手くていらない殺しが出来た時はいつも来夏君が殺っていました。」

「そうかじゃあ最後に――――」

カランカラン

「ん？」

樋上の言葉が何かの音で遮られる。窓から何か缶のような物が投げ込まれたのだ。付き添いの警官がそれを拾うとそれは・・・・・・

「捨てろ！？スタングレネードだ！」

スタングレネードとは相手を傷つける事がないように音と光のみを発する手榴弾で人質などを救出する時などや相手をかく乱する時に使われる物である。

大きな音と共に閃光が取調室を包む。部屋に居た３人（樋上、警官、真紀菜）はモロに喰らってしまい目を押さえる。とその時窓が割れる音が同時にする。

「真紀菜！こっちだ。」

爆発の瞬間咄嗟に耳を塞いでいた樋上は耳だけは聞こえていた。そう、その声は・・・・・・

「久慈来夏か！」

「悪いが刑事さん真紀菜は返してもらう。」

「待って来夏君、私は―――」

再びスタングレネードの爆発音がする。その音で樋上と警官は完全に気絶した。

深夜の廃ビル。

そこには真紀菜と来夏。そして真央と優喜の４人が集まっていた。

「真紀菜。何で自首した。」

優喜が問う、その顔にはいつもの含んだ笑みは無い。

「ごめんなさい優喜君。私、もう――――」

パンッ

「いたっ！？――――」

乾いた音と共に真紀菜の悲鳴が聞こえる。優喜が真紀菜の頬を叩いたのだ。

「おまえのせいで俺と真央が８年掛けて作った計画が崩れる所だったんだぞ！如何責任取るつもりだ真紀菜！？」
真紀菜を柱に押しつけ胸倉を掴む優喜。
「――――ゴメン――なさ――――い」
「つっ――――――ふざけるな！？」
優喜が真紀菜の衣服を破く。
そして真紀菜の白い肩が見えて来た。
「身体に教え込まないと解らないらしいな。こっちは今なら簡単にお前を殺せるんだぞ。」
優喜は破った衣服を捨てると再度真紀菜に殴りかかろうとする。
「待て！？優喜。それ以上やったら死んじまう。真紀菜がいなけりゃ、それこそ計画が崩れちまう。だからおまえも来夏に助けに行かせたんだろ。
」
真央に止められ優喜は掴んでいた真紀菜を話す。掴まれていたことでバランスを取っていた真紀菜は力無く地面に倒れこんだ。
「ごめんなさい――――優喜君ゴメンナサイ――――」
真紀菜はそう何度も繰り返しては目から大粒の涙を零した。
「今度あんなことしたら殺すぞ。わかったな。」

優喜はそう言い残すと廃ビルから出て行った・・・・・・

「来夏。真紀菜の様子は？」

優喜が出て行った後、真紀菜を真央の自宅に運び寝かせたのだ。

「優喜に怒られたのが相当聞いてるみたいだな。寝言でずっと俺たちに謝ってる。」

「そうか・・・・・・悪かったな指名手配されてるのに警察に乗り込ませて。」

真央が申し訳無さそうに言う。

「大丈夫スイッチ入れ替えれば大事な事以外は覚えないから。ああ、それよりも文香もこっちに来させた方がいいかも知れない。あの樋上とか言う刑事、もう実行部隊の3人は知ってる。それにおまえと優喜のことにも近づいてるみたいだ。」

「それならもう大丈夫だ。廃ビルから出る時文香には連絡入れておいたから、もう直ぐ着くはずだ。それに・・・樋上だっけ？その刑事。俺と優喜の情報は何一つ残ってないんだ。それにＥｘｃｌｕｄｅ Ｃｈｉｌｄｒｅｎの計画にも無理はあった。計画が済めば俺たちは死刑でも良い。それがルールだ。覚悟は出来ているさ。」

「そう・・・・・・だな俺たちはまだやることが残ってるんだからな・・・」

一つの歯車が戻りかけた・・・・・・しかしそのことを許さなかった大きな歯車は戻りかけた歯車を再度逆回転で回し始めた・・・・・・

ＦＩＬＥ３；　直り掛けた歯車（後書き）

何かスラスラ掛けちゃうんすけど・・・なんででしょうか？まあ好調な時はいっぱい書いた方が得だと思うので頑張って投稿しますです。

余談ですがＲ１５指定にした割にはあんまりそういう要素は出てきませんね。。。

ＦＩＬＥ４；　小さく無垢な歯車

宮戸真紀菜が自首してから三日。真紀菜は来夏の手によって再びＥｘｃｌｕｄｅ　Ｃｈｉｌｄｒｅｎへと戻されてしまった。
そして監視をしていた佐納文香も行方を暗まし、捜査は難航していた。手がかりと言えば真紀菜が言っていたＥｘｃｌｕｄｅ　Ｃｈｉｌｄｒｅｎは『抹消』された子供がその親に復讐する為に作られた組織。と言う事は現在の被害者は４人と言う事は少なくとも後３人は犠牲になると言う事である。まだ解らない３人の子供の親と連絡できれば護衛を付けることも出来るのだが、Ｅｘｃｌｕｄｅ　Ｃｈｉｌｄｒｅｎは何故『抹消』されたかと言うと社会の風当たりなどを気にした親が自分の身を守る為にやった事だ。ましてやターゲットになっている親はまさか自分が狙われているなんて思ってもいないだろう。そう考えるとやはりターゲットの先読みは困難であった。

「おい、その後のＥｘｃｌｕｄｅ　Ｃｈｉｌｄｒｅｎの様子はどうなんだ？」

「この前のことが嘘のようですね。殺人事件一つ起きてません。」

捜査本部で相変わらずタバコをふかしているのは樋上だ。真紀菜に逃げられてからの三日間。捜査本部に泊り込みで資料を集めている。

「俺が頼んであった人には連絡が取れたのか？」

「えっと・・・・・確か国会議員の田淵真三（たぶちしんぞう）氏ですね。先ほど連絡が取れて面会も許可が下りました。」

樋上は部下から田淵議員が住んでいる家の地図を受け取り、タバコを灰皿に押し付ける。

何故田淵議員に面会するかと言うと、理由は簡単だ。死亡報告書に田淵議員の息子が乗っていたから。

「俺はこの議院のところに行くから、おまえは引き続き資料を集めてくれ。」

樋上はそう言うと捜査本部を後にした。

車で向かう途中樋上は再度資料を読み直していた。

———田淵真三６７歳。８年前議員に立候補する話が持ち上がっていた矢先、息子の田淵真理（たぶちしんり）。当時４歳の子供が病死、息子の為にと言い議員に立候補。見事当選したが当選してから数ヶ月の間同情を引く為に息子を殺したのではないかと言う噂も飛び交っていた。しかしそんなものただの推測でしかなく、８年経つ今は民事党（みんじとう）の中心人物として活躍している。

だがこの息子の死亡は少し引っかかる点があり前の日まで元気だった息子が次の日急に死んでいた。しかも田淵家のお手伝いさんは誰一人その遺体を見ておらず発見したのは父親、田淵真三。その後は救急車も呼ばず自分の車でわざわざ遠い病院の主治医に息子を見せに行くなどと不可解な行動が多かった、まるで息子を見られてはいけないかのように・・・・・・

そんなことを考えていたらあっという間に田淵議員の家に着いた。
玄関が開き樋上は応接室に呼び出された。

「この度はお時間をとっていただきありがとうございます。私はＥｘｃｌｕｄｅ　Ｃｈｉｌｄｒｅｎ対策本部の樋上と言います。」
畳の部屋。机を間に置き田淵と樋上が向かえ合わせになる。

「いやいや、それで刑事さんが私になんのようですか？」

「今回、Ｅｘｃｌｕｄｅ　Ｃｈｉｌｄｒｅｎと呼ばれる組織は親に『抹消』された子供たちがその親に復讐すると言う経緯で動いています。それで我々警察本部に田淵議員の命を狙うと言う情報がありまして我々警察をどうか刑事に付けていただけないかと・・・・・・」

もちろん田淵の命を狙っている奴なんて嘘だ。しかし息子がＥｘｃｌｕｄｅ　Ｃｈｉｌｄｒｅｎである可能性は十分ある。そこで嘘をつき刑事を付けさせる事で動向を探るつもりなのだ。

「ムムム・・・・・・」

田淵は暫く黙っていたが、重い口をあけ

「そう言う訳なら仕方が無い。こちらからも警護をお願いします。」
田淵はあっさりと樋上の要求を受入れた。これは樋上にとっても少し拍子抜けであった。
樋上が思うに田淵はきっぱりと断り話は長期戦になる事を考えてい

たのだ。

「おっとそれでは警護は今日の夜からで良いですかな？私はこの後他の議員と会う約束がありますのでこれで失礼させていただきます。」

その夜。樋上は三人の刑事を連れて再び田淵家へを来ていた。Ｅｘｃｌｕｄｅ　Ｃｈｉｌｄｒｅｎが来るかはまだ不明だが来る可能性は十分ある。その為樋上たち四人は防弾チョッキに銃を装備しここに来たのだ。

「いや～この度はどうも私の警備に来てくださり恐縮です。」

部屋では田淵が待っておりそこには豪華な料理が所狭しと並べられていた。

「いや、田淵議員、我々はあくまで護衛なのでこんな料理は・・・・・・・」

「いえいえ、護衛と言っても私にとっては客人でもある。それに命を守ってもらうんだ。これぐらいしてもバチは当たりませんよ。」

田淵は四人を座らせると食べるように勧めた。最初は遠慮していた４人ではあったが田淵の押しに負けそのまま料理を食べてしまった・・・・・・

「樋上さん。Ｅｘｃｌｕｄｅ　Ｃｈｉｌｄｒｅｎと言うのはやはり私に恨みを持っているのでしょうか？」
食べ初めてから一時間他の刑事はすでに食べ終わり部屋から出て行った。樋上はすっかり酔ってしまった田淵の面倒を見るハメになった。
だが勤務中なので酒を勧められても飲まなかったので４人とも酔ってはいない。その点ではまだ良かったであろう。

「私はいろいろな物を犠牲にしすぎた。息子を亡くし、残った妻の為にもと必死に仕事をしてきた。しかしそれが逆に妻を一人にさせてしまっていたらしい。妻は３年前に他界。良く考えたらもう何年も話していなかったんですよ。」
田淵は酒が入った勢いもあったせいか、涙を流しながら樋上に愚痴を零す。

「失礼します。そろそろ就寝の時間ですが・・・・・・」
お手伝いさんが入ってきて時刻を伝える。良く見たらもう１１時を過ぎていた。
田淵によると明日は朝から大事な人と会う約束があるらしい。そのため就寝は早めにしていたのだ。

「いやはや、長話をしてしまいましたな。樋上刑事。どうもありがとうございました。それではよろしくお願いします。」

田淵はそういい残すと自室に入っていった。

時刻は深夜2時。樋上たちは2人が外でもう2人は田淵の部屋の前に居た。樋上は田淵の部屋の前にいたがここ二週間ろくに寝ていないのが祟ったのかコクリコクリと首を揺らし寝息を立てていた。隣の刑事は起きてはいるがこちらも眠そうである。多分田淵に勧められ夕食を多く取りすぎて眠気が襲っているのだろう。
そして二人の緊張が切れたその時。

パンパンパン

乾いた銃声が3発。樋上と刑事は慌てて飛び起き樋上はドアを蹴破ろうとする。もう一人は銃を構え小声で外にいる刑事に応援を呼ぶ。
「クソッ！今度からはもっと柔な扉にしろ！」
大きな音と共に樋上と刑事がなだれ込む。窓が開いている。少し肌寒い風が頬を撫で、月明かりに田淵と少年を照らす。

「田淵真理・・・・・だな。」

少年はゆっくりと樋上の方へと首を動かす。黒い髪が風に揺れ、やけにその顔が目に焼きつく。
頬には返り血がついており、少年の足元には田淵真三が倒れていた。
2人は銃を構える。
「田淵真理。その人から離れろ！さもなければ撃つぞ。」
少年は少し目を細める。が直ぐに田淵に向き直りそして
パンパンパンパン
銃に残っていた弾を全て倒れている人に向かって撃った。
「撃て！！」
樋上の掛け声と共に2人は手や足を撃つ。少年は小さく呻き銃を手から取りこぼす。
そして足元にある血溜まりに倒れこんだ。
「死にましたか？」
銃を構えたままの2人は慎重に近づく。
「いや、息はしているな。」
近づいていくごとに小さく荒い息が聞こえてくる。
「お兄さんが樋上刑事？」
少年の口からそんな言葉が発せられる。
「ああ。」

「今ねお父さんを殺す時。僕に言ったんだ『俺が悪かった。許してくれ』ってね。フフ・・・・・・笑っちゃうよね今まで自分がやってきた事知ってるくせに。」

少年は笑う。そしてゆっくりと立ち上がる。

「なっ！？」

樋上は驚いた。何故立ち上がれる。腕や足に銃弾を喰らってしかも血溜まりができるほど血が出ているのに、しかも相手はまだ１２歳の少年だ。大人でも立ち上がれそうに無いこの痛みがどうしてこんな小さな少年に耐えられるのか・・・・・・それが樋上には理解できなかった。

「知ってる？お兄さん。僕は無痛症なんだ。だから撃たれても痛くない。だから撃たれても立ち上がれる。」

カランカラン

目の前に見覚えのある缶が投げつけられる。そうスタングレネード。

「ちっ！耳を――――」

刑事に言おうとしたが途中で声が遮られる。

激しい閃光と大きな轟音で目と耳が使い物にならにならなくなる。

その時、聞こえた気がした。

「僕はこれで生きられるのかな？ねえお兄さん？」

目と耳が回復した時はもうそこには血の跡と火薬の匂いしか残っていなかった・・・・・・

「よくやった。真理。怪我は大丈夫か？」

場所は真央の家。そこには六人のＥｘｃｌｕｄｅ　Ｃｈｉｌｄｒｅｎが集まっていた。

「わかんない、痛くないから。」

「そうか・・・・・・真紀菜。手当てしてやってくれ。文香は輸血の準備。」

「うん、わかった。」

「りょうか～い」

顔が少しはれている真紀菜。やはりあの後優喜に痛めつけられたのか。真理を連れて奥の部屋に行ってしまった。

もう一人の少女にも見える長い髪をした少年は間の抜けた声で返事

をして輸血パックを手に取り準備をしている。

「優喜。あと何人で終わりだ？」

「3人。後たった3人・・・・・それで俺たちの計画は完成だ。」

優喜は壁に書いてあった顔写真に×印を付けていく。残りは3人。

「俺、そして雛子。そしてその後に1人。」

薄く笑う優喜。

その笑みは最初より澱(よど)んでいた・・・・・・

小さく無垢な歯車。現実を知らぬままに逆回転で回り始めた・・・・・

ＦＩＬＥ４；　小さく無垢な歯車（後書き）

二日続けて投稿。始めてかも
まあ頑張ります。。。

ＦＩＬＥ５；　戸惑う歯車

「今現在確認されているのは四人のＥｘｃｌｕｄｅ　Ｃｈｉｌｄｒｅｎで久慈来夏、宮戸真紀菜、佐納文香、そして昨日確認した田淵真理。今までの被害者は５人でＥｘｃｌｕｄｅ　Ｃｈｉｌｄｒｅｎの傾向で見ると、今確認されているＥｘｃｌｕｄｅ　Ｃｈｉｌｄｒｅｎはもう殺人はしない。だがまだ確認されていない子供が３人。宮戸真紀菜が言うには『真央』と『優喜』と言っていた。現在の状態では情報は少ない。だがこのまま見過ごすわけにもいかない。各自警戒を怠るな！」

捜査本部で集まった刑事たちに樋上が激を飛ばす。刑事たちは銃の手入れをし、各自受け取った資料を基に捜査に行った。

一方樋上は『真央』と言う少年を探すべく今から街中を駆け巡るらしい。

そんな矢先。

「樋上くん。」

振り向くとそこには対策本部長。

「今回の事件、これ以上事件が起こると君の進退に関わる。どうか気をつけてくれ。」

本部長も樋上のことを心配しているのはわかる。だが今の状況ではそんな言葉は何の意味も無い事は明白であった。

樋上は無言で敬礼をし、そのまま出て行った。

場所は真央の家。
今日は珍しく朝がうるさかった。
ジャージ姿の来夏が2階から起きてくる。
「あれっ？真央。学校行くのか。」
寝ぼけ眼の前には制服を来て口に食パンを加えた真央が立っていた。

「うん。僕は一応学生だし、これ以上休むわけにはいかないよ。」
真央は来夏にそう返答する。
「・・・・・・おまえ、ネコ被るの得意なんだな・・・」

「そんな事はない。これでも結構疲れるんだよ、こっちは」
来夏に口調のことを指摘されると急に凛々しい口調に変わる。真央は学校では大人しい学生を演じているのだ。
シナリオ的には体が弱く運動が苦手、だがそれを補う知力があると言う感じだ。

「まあ、俺は外には出られないからな。真紀菜と真理でも見てるよ。」
「ああ、頼んだぞ。来夏」
真央は来夏に家を任せ家を出る。玄関から出た真央の顔はすでに弱々しい少年の物であった。

樋上は街中を駆け巡り『真央』と言う少年を探していた。確かに今までのことを考えると偽名の可能性もある。しかし情報が少ない今、少しの情報をどれだけ有効に使うかが試されてくる。
まず樋上は『真央』という少年のデータをまとめる。真紀菜から聞き出した情報は四つ。
まず『真央』は少年と言う事。と言う事は歳は中高生と限られてくる。
二つ目はＥｘｃｌｕｄｅ　Ｃｈｉｌｄｒｅｎの実行部隊の中心的な存在。つまり頭脳派と言う事になる。
三つ目はもう一人殺している。事件の中で容疑者がわれて居ないのは榊原一之介だけ、と言う事は榊原高校に通っていた。もしくは通っている可能性が高い。

そして最後は慎重な性格。つまりここ一週間の出来事で3日ほど休んでいる。と推測できる。

この考えを踏まえると最初に向かう場所は榊原高校と言う訳だ。

早速樋上は理事長に会いに行き生徒名簿を借りた。そしてその中にあった『真央』は一人だけ・・・・・・

「この天竜寺真央君と言う子はどう言う子ですか？」

「ああ、その子でしたら少し病弱で休みがちですがとても賢い子で生徒の模範のような子です。」

「・・・・・つかぬ事お聞きしますがこの少年はここ一週間休んでいましたか？」

聞くと理事長は出席届けを持ち出し調べる。

「ああ、確かにえーと・・・・・ああ、久慈翔太君が失踪した次の日から昨日まで休んでいますね。」

―――来夏が失踪してから昨日まで・・・・・・

「ありがとうございました。あの、昼休み天竜寺真央君に会わせて頂いてもよろしいですか？」

その申し出に理事長は快く応じてくれた。

樋上は理事長室を出ると懐に入っている銃を改めて確認した・・・・・

「始めまして、天竜寺真央です。・・・・・・あの何で校舎裏なんかに？」

昼休み、理事長に頼んで真央を呼び出してもらった場所は校舎裏。
ここなら滅多な事では人は来ない。
真央は少し怯えているようであった。

「私はＥｘｃｌｕｄｅ　Ｃｈｉｌｄｒｅｎの捜査本部に居ると言う事は噂で聞いているね？」
「はい、久慈翔太君の事件が噂になってますのでそれで少しは・・・・・・」

樋上の質問に真央は一つ一つ丁寧に答えていく。
「突然だが家族構成は？」

「母が一人、妹が一人。だけど今は一人暮らしをしています。」
「わかったじゃあ、今日学校が終わったら君の家に言っていいかな？」
「えっ？」

真央の口から声が漏れる。

――食い付いたか！？

樋上はこう睨んでいた。この少年が真紀菜が言っていた『真央』でこの少年の家には今他のＥｘｃｌｕｄｅ　Ｃｈｉｌｄｒｅｎが全員いると。

理事長に頼んだ後不動産屋に行き天竜寺真央の家を見させてもらった。

天竜寺と言うのは珍しい苗字でもあったため簡単に見つけることが出来た。

大きさは一戸建てで３階まであり一人で住むには大きすぎるぐらいだ。しかも家は学校から１０ｋｍ近くありそんな場所から学校に通うことは考えにくい。

その理由は家にあまり人を近づけたくなかったのであろう。

もしこの後真央が家に電話をしてＥｘｃｌｕｄｅ　Ｃｈｉｌｄｒｅｎを逃がすような事があれば真央の家に向かわせた刑事が捕まえる。

逆に家に残しておけば確認が済みしだい天竜寺真央を盾に家から出て一気にカタを付ける。

樋上の作戦は完璧に近かった。

――この刑事。やはり俺の事に気がついてるのか？

２人の考えが交差する。

「いいですよ。僕は家に帰ったら暇なだけですし話ぐらいなら喜ん

で付き合います。」

「わかった。それじゃあ放課後校門の前で待ってるから。」

「はい、それでは後ほど。」

そう言い二人は別れた

放課後。真央は約束通り樋上と待ち合わせ家に向かっていた。
１０ｋｍ以上ある家まで着くには道が開いていれば２０分ほどで着くであろう。

「刑事さん。」

突如、真央の口が開く。
「今の日本を如何考えますか？」

「難しい質問だな。だが刑事として見ると今の日本は荒んでいると思うよ。」

「・・・・・・僕は父親の顔をほとんど覚えていません。母が言うにはとても嫌な奴だったそうです。いつも暴力を振るわれながらも、幼い僕と妹を育ててくれました。なのにあの男は母が死にそうな時にギャンブルをやる為にと病院費を持っていってしまったんです。そして母は死んだ。そんな人が居るのに日本は荒んでいると言うたった一言の言葉で片付けられるはずが無い。」
真央の手が怒りで震えている。

「だけど、それが人を殺して言いということには繋がらない・・・・・・」

樋上の人と事でその手の動きも止まる。
真央は伏せていた顔を挙げ樋上を見る。

「どう言う事・・・・・・ですか？」
「いくら父親がそんなんでも殺して良い訳が無い。どんなに汚い男でも、殺人をしたら君も汚くなってしまうんだよ榊原真央君」

「・・・・・・いつから・・・気付いていたんですか？」

「ついさっき、理事長に学校中の資料を集めてもらって君と校長のつながりを見つけたんだ。」

真央の顔が変わる。
「そうか、やっぱ学校なんてさっさと辞め解きゃ良かったかな？・・・・・・刑事さん、最後に聞く。『存在』って何だと思う？」

樋上は暫し考え、

「・・・・・・生きる事？かな。少しクサイかもしれないが、それが『存在』だと俺は思う。」

真央は再度顔を俯け、鞄から資料を取り出す。その資料を綺麗に分けて、確認していく。

「刑事さん、今何時？」

「４時丁度だ。」

「この先の国立病院の院長室。そこに遺体がある。警察を呼ばれる前に言った方が良い。何かと大変だからな。」

樋上はその言葉を聞いて思わずハンドルを切ってしまう。

慌てて戻し真央を横目で見る。

「国立病院の院長って確か。」

「手術ミスで告発されそうな奴。梶山淳平（かじやまじゅんぺい）。殺ったのは今から１０分前犯人は梶山雛子（かじやまひなこ）。俺たちの最後の仲間だ。後これが今後のターゲット。話代ぐらいにはなるだろう。」

「話代っておま――――！！」

樋上が横を向くと真央はシートベルトを取りドアをあけていた。そして

「止められるんなら止めてみろ。俺たちは『存在』を手に入れる。」

飛び降りた。

慌ててブレーキを踏む樋上。車から出て辺りを見回したときにはもうそこには真央の姿は無かった。

迷う歯車。しかしそのまま回り続ける。逆方向に・・・・・・・・・

ＦＩＬＥ５；　戸惑う歯車（後書き）

自分で書いてると何かネタばれクサイです。
まあ気にしないで書こう。
多分後二～三話だと思います。。。

FILE6； 折れた歯車

「昨日殺されたのは梶山純一。国立病院の医者だ。この男は保険金殺害の手助けのため手術ミスをするが、違う親族から告発されそうだったようだ。」

真央と話した次の日。樋上は真央を追うのを諦め病院へ行ってみると確かにそこで梶山純一が死んでいた。
その後真央の家に行くとすでに誰も居なかった。

「そして俺があるルートから受け取った資料はこれだ。」

刑事全員に資料がいきわたる。そして刑事全員が驚愕する。
その資料に写っていた写真とは・・・・・・

「現警視総監。神崎忠明（かんざきただあき）。現総理大臣。三浦大吾（みうらだいご）。この2人だ。この2人を二班に別けて護衛する事になった各自気を抜くな！！」

刑事が一斉に散らばった・・・・・・

「真央、刑事に正体が知れたって本当か？」
「ああ、おまけに資料を盗まれた。だからターゲットはもう向こうに知れてるな。」
真央が銃を慣れた手つきで組み立てる。
隣には小柄な少女。腰までに伸びた髪は風に揺れ、目は少し垂れている。
真央の隣に寄り添い離れようとしない。
「ねぇ、真央。これで私たち本当に生きられるの？」
「ああ、そうだ雛。俺たちはこれで『存在』を手に入れるんだ。」
擦り寄ってくる雛子を真央は優しく抱きしめる。
愛しい相手を抱きしめるかのごとく、真央は暫く雛子を離さなかった。
暫くして雛子を離した真央は立ち上がり周りを見た。
「俺たちは『存在』を手に入れるんだ。三浦大吾は来夏、真紀菜、雛葉。神崎忠明は俺と優喜、文香、真理だ。このチームで俺たちのターゲットを沈める。みんな、頼んだぞ・・・・・・」
七人はそこで別れた。

警視庁。の最上階。そのに警視総監の部屋があった。
警視総監神崎忠明。４２歳と言う若さで警視総監の地位に上りつけた男。ひょろりとした体格で口ひげを蓄えている姿は妙な威圧感を放っていた。

「Ｅｘｃｌｕｄｅ　Ｃｈｉｌｄｒｅｎ対策本部の樋上警部補であります。」

樋上を含め１０人の刑事が警視総監に敬礼する。
「今回の話は聞いている。Ｅｘｃｌｕｄｅ　Ｃｈｉｌｄｒｅｎが私を狙っているのらしいな。各員、警戒を怠らないようにしてくれ。」

神崎の言葉を聞き、一同は再度敬礼をした。その後刑事たちは銃を片手に外の配置についていった。
樋上を残して。

「警視総監殿。聞きたいことがあります。」

「なんだ？樋上警部補。」

一人だけ配置に着かなかった樋上に警視総監は不審な目を向ける。
「Ｅｘｃｌｕｄｅ　Ｃｈｉｌｄｒｅｎは親に『存在』を奪われた子供の集まりです。そしてその子供たちはいままで自分の親しか殺していません。となるとあなたは何故狙われているのか。と言う疑問が浮かび上がる。それはあなたも自分の子供から『存在』を奪った

からじゃないですか？」

「貴様！警視総監に向かって失礼であろう！」

隣に立っている警視監が樋上を怒鳴り散らす。

しかし樋上もそんな事には怯まず、一枚の紙を警視総監に手渡す。

それは一枚の死亡報告書・・・・・・名前は神崎優喜。

それを見た神崎は怪訝な顔をする。

「この少年がＥｘｃｌｕｄｅ　Ｃｈｉｌｄｒｅｎのリーダーをやっている事はもう調べは着いています。そしてここに今あなたとの関係も証明された。」

「よく・・・・・・調べたな。そうだ、神崎優喜は私の息子。８年前、私が――――」

神崎が何かを言おうとした。しかしその声は轟音と共にかき消される。

警視庁は大きく揺れ、部屋に居た3人は床に倒れこんだ。

「な、何があった！報告しろ。」

樋上が置いてあった無線に向かって怒鳴り散らす。

無線の方からは雑音が大きく、声が聞き取りにくかった。

「こちら、警視庁1階。一般市民を非難させた直後何者かが仕掛けた爆弾が爆発。重傷者１８人。辺りは黒煙で視界が悪く犯人の確保は難しいとされています。」

続けて3階からも無線が入る。

「こちら警視庁3階銃を持った少年が2人、こちらに向かって発砲

中。すでに刑事7人が重傷。至急応援を―――」

銃声と共に無線がきれる。そして下の階からは再び爆発音。しかもドンドン近づいてくる。

樋上は部屋から出るとそこにはもう2人の少年が立っていた。1人は真央。もう1人は優喜。そして2人の足元にはピクリとも動かない仲間の刑事たちが横たわっていた。

反射的に樋上は懐から銃を取り出して撃つ。

しかしその弾丸は真央と優喜には届かず。立てかけてある机に当たる。

「とうとう来たか。真央、優喜。」

「その口ぶりだと俺の事も調べ終わったんですか？樋上刑事さん。」

机越しに二人の声が交差する。

「俺たちは『存在』を手に入れる。そのためにはもう犠牲は構わない。」

真央が机から飛び出した。

樋上はその真央に向かって銃を乱射する。

1発、肩に当たり貫通する。しかし真央は止まらない。

2発、今度は太股に貫通。しかし真央は止まらない。

まるで真理のように痛みを感じないからこそ出来る動きのようだ。

真央が銃を構える。

「死ね！」

一発の銃声音。弾丸は真っ直ぐ樋上に向かって伸びる。
避けられない、真央は勝利を確信し、気が緩んだ。

ドン

重い音。樋上の頭から血が垂れる。手には銃。しかし大型のショットガン。自分で持ち出したのだろうか？
その弾は真央の腹を深々と抉っていた。

「がっ！？」

真央が声をあげ吐血する。
撃たれた腹からは鮮血な血が限り無く流れていた。

「真央！」

気を抜いた優喜。机から飛び出して真央に駆け寄る。

ドン

再び重く大きな音。今度は優喜の腹を抉る弾。

樋上の目はもはや見えていない。真央が撃った弾は樋上の目をかすめ左目からは血が雪崩れのように垂れていた。
優喜は持っていた銃を取りこぼし、その場に膝を着く。

「まだ、だ。俺はまだ『存在』を手に入れていない。俺から『存在』を奪ったアイツを殺してないんだ。」

足に力が入らない。血を多く流しすぎたのだろう。霞む目を擦りながら優喜は部屋のドアへと手を掛ける。

中には2人の男性。

1人は知らない。もう1人は・・・・・・

バン

一発の銃声。

構えているのは神崎忠明。撃たれたのは優喜。

「オヤ・・・・・・ジ」

警視庁はその一発の銃声で静寂に包まれた・・・・・・

総理官邸。そこも銃撃戦に見舞われていた。数で言うと圧倒的な差があった。たった3人で、武装、厳重体制で待っている総理官邸に

突撃するなんて自殺行為だ。しかし現状はその3人が押していた。
他の部屋はもはや血の海。官邸の中で生きているのは来夏たち三人と、総理大臣三浦大吾。3人は銃を構え三浦を包囲していた。
「三浦大吾。俺たちの復讐の対象外だったが次の世界の為に死んでもらうぞ。」
来夏はそう三浦に言い次の瞬間三浦の頭を躊躇無く打ちぬいた・・・・・・

3人は三浦を殺害した後警視庁に向かい、文香たちと合流した。しかし真央たちと連絡が取れない事を知り来夏は無線を手に取る。
「こちら来夏。真央、優喜、聞こえるか？」
「久慈来夏か？」
来夏の使っている無線から樋上の声がする。
「！何故お前が！？2人はどうした？」
「真央は重傷、優喜は殺した。」

その言葉に5人は驚きを隠せない。
荒れ果てた警視庁の1階。けが人はすでに病院に運ばれているので、残っていた刑事たちはみんな死んでいる。
5人は慌てて警視総監の居る部屋に向かう。

「真央！優喜！」

勢い良く開けたそこには・・・・・・

「そこまでだ、Ｅｘｃｌｕｄｅ　Ｃｈｉｌｄｒｅｎ。」

樋上を中心とした刑事たち数十人が5人を取り囲む。
「樋上。やはりあの時殺しておけばよかったのか。」
来夏は苦虫を噛み潰したように落胆する。
真紀菜は怯える雛子を胸に抱え文香と真理は銃を構え警戒態勢をとる。
「もう抵抗はやめろ。この状況ではお前たちに勝ち目は――――――」
「俺たちは最初から勝ち目なんてあると思っちゃいねえ、だが神崎を殺すまで俺たちは死ぬ訳には行かないんだよ。優喜の為にも、俺たちのためにもな！」

来夏が銃を構える。

だが発砲したのは周りの刑事たちであった・・・・・・

その銃声で事件は幕を閉じた・・・・・・

狂った7つの歯車は逆回転を初め、やがて負荷がかかり、呆気なく折れて壊れてしまった・・・・・・

ＦＩＬＥ６；　折れた歯車（後書き）

つ、疲れた。目がつぶれそうなぐらい痛いです。
でも頑張ります。。。

ＦＩＬＥ７；　ヒビ割れた歯車

事件から一週間Ｅｘｃｌｕｄｅ　Ｃｈｉｌｄｒｅｎ事件は呆気なく幕を閉じた。
この事件の実行したＥｘｃｌｕｄｅ　Ｃｈｉｌｄｒｅｎの７人は
榊原真央――重傷で警察病院で治療中。隠し持っていた銃で医師を射殺。再度逃走を試み、行方不明。
神崎優喜――神崎忠明の手によって射殺。最後まで神崎忠明に銃を向けていた。
久慈来夏・宮戸真紀菜・佐納文香・田淵真理・梶山雛子――最後の一斉射撃の中部屋から飛び出て、逃走。その後、真央と合流後行方不明。

結局Ｅｘｃｌｕｄｅ　Ｃｈｉｌｄｒｅｎは１人死亡。残り６人は逃走。
Ｅｘｃｌｕｄｅ　Ｃｈｉｌｄｒｅｎによって殺された人は合わせて７３人と絶大な被害を受けた。
マスコミは暫しこのネタでもちきりであった。

樋上がパソコンを閉じる。
片目は眼帯で隠されていて全体の顔は良く見えない。
「樋上警視。それがＥｘｃｌｕｄｅ　Ｃｈｉｌｄｒｅｎの報告書ですか？」

「ああ、まぁな。」

後ろから顔を覗かせているんのは新しい部下。
Ｅｘｃｌｕｄｅ　Ｃｈｉｌｄｒｅｎの時の樋上の活躍が認められ警部補から警視に昇格したのだ。
「如何したんですか？何か気になる事でもあるんすか？」

「ああ、実は榊原真央が逃走する前の日に一度面会したんだそのときに・・・・・・」

「俺は後悔してませんよ。俺と母親を捨てた、あのクソ親父を殺せたんだからね。」

酸素マスクをつけながら喋る真央。

「知ってますか？刑事さん、雛子って小さい女の子居たでしょ。」

確か最後の時真紀菜の隣にそんな子が居たような・・・・・・

「あの子は前に話した俺の妹なんだよ。金に滞った親父が雛子を梶山に売ったんだ。」

樋上は驚愕するがその事で今まで考えていた樋上の疑問も解決する。戸籍には梶山雛子という名前は無かった。しかし梶山雛子は存在した。何故か？それは買収されていたからだ。戸籍を移すと記録に残ってしまう。そのことを知られたくない梶山は戸籍は移さずに榊原雛子を買ったんだ。

「雛子は梶山の家では酷い扱いをされたらしくて、それでアイツは梶山の家から逃げてきたんだ。顔も忘れかけてる俺を探して・・・・・・」

真央の目から涙が零れる。

そこで面会は終了した・・・・・・

「へえ、そんな事があったんすか。」

「ああ、そして次の日。腹にはまだ穴が開いてるって言うのに、あいつは逃げたって訳だ。」

二人が話していると―――

「樋上さん、テ、テレビ見てください！」

違う刑事が慌てて入ってくる。

樋上は言われた通りテレビをつけるとそこには・・・・・・

『えー今日の朝未明。神崎忠明警視総監が自宅で射殺体で発見されました。』

樋上は加えていたタバコを取りこぼす。

『被害者は頭をライフルで撃ち抜かれており、窓にはＥｘｃｌｕｄｅ Ｃｈｉｌｄｒｅｎと書いてある紙が発見されました。』

「おい、現場に行くぞ！！」

樋上は立ち上がり現場に向かっていった・・・・・・

狂った歯車は再度回り始める。正常な歯車はそれを止めにかかるが歯が立たない。

狂った歯車はヒビが入りながらも再度力強く回りだした・・・・・・

ＦＩＬＥ７；　ヒビ割れた歯車（後書き）

やっと終わった。だけど再度読み直してみると駄作のような気がしてきました（泣）

読者が集まる事を願います。。。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2923e/

Exclude Children〜the seven children〜

2010年10月9日21時44分発行